

漢字は女性蔑視なのか

クライアント先に、女性だけで運営している会社がある。友人の女性が四半世紀前に起こした会社で、その際、私は株主になった。といっても金額は数万円。ご祝儀代わりの投資だ。そんな縁もあって、いまも年に1度か2度の割合で宴席に誘われる。

先日その席で、いわば男性代表として言葉のパンチをくらった。宴たけなわとなった頃に、かなり酩酊した社長がこう切り出した。

「漢字が無くならない限り、この国の女性蔑視はなくならないわね」

「どうして？」と訊いた私が、火に油を注ぐ形となった。

「漢民族の文字であると同時に、漢^{おとこ}の文字でもあるからよ。たとえば『雌雄を決する』。雄は偉く、雌はダメってことでしょ？」

社長の言葉に反応して、女性ばかりの座が一気に盛り上がった。

「あ、私も前から思ってた。『処女作』とか、ふざけるなって。男なら『童貞作』って言ってほしい」

「一種の処女崇拜でしょ。気持ち悪い」

女子会のノリで、厳しい言葉が相次いだ。耳に痛いものの、ごもっともな発言だ。

「『妨げる』なんて、最低。どうして女の方なのよ」

「私が頭にくるのは『鬪る』って字。男の願望が如実に表れている」

「よくそんな字を思いついたものだわ」

だいたい居心地が悪くなってきて、私も軽く反論した。

「なぶるって読みには、もう一つ別の漢字があるよ。男二人に女が一人、じゃなくて、その反対。それも『媿る』って読む」

男偏の文字がないのはなぜ？

「それにしても、女偏にはひどい字が多いと思う」

そう言って社長がスマートフォンを取り出し、検索を始めた。「ほら、あるある、ひどいのがいっぱい」

例として挙げたのは、奴、婢、奸、嫉、妬、嫌、妄、姦など。なるほど。男目線であることは確かだ。

しかし好、娘、嬉のように、女性蔑視には当たらない文字もある。それを指摘すると、「女子を好きだから『好』、良い女は若い『娘』だけ。女が喜ぶと男は『嬉しい』。いかにも男っぽい発想だし、そもそも上から目線よ」

こんな感じのやりとりがしばらく続いた。

「だったら、いっそのこと社内の公用語は英語にするとか？」

そう言ったのは帰国子女の役員だった。

盛り上がった雰囲気はそこでいったん終息し、みな思い思いに吐息をついた。

この会社で英語を話せる者の割合は高かったが、それを公用語にするとなるとかなりの時間とコストがかかるだろう。現実的な選択とはいえない。

「女偏の文字はたくさんあるのに、男偏がないのは、なぜ？」

また話題がふりだしに戻った。

「思いつかなかったんじゃないの、自分たちのことは」

社長のひとことで万座爆笑となった。村上春樹氏の小説なら、私は「やれやれ」とつぶやくべきところだろう。

それにしても、なぜ男偏の文字はないのか。素朴な疑問だが、ちょっと調べてみようという気になった。